

第18回

十湖賞 俳句大会

入選句集

浜松市中央区東地域俳句の里づくり事業

令和8年2月発行

<発行元>

浜松市中央区東地域俳句の里づくり事業実行委員会

<事務局>

浜松市中央区東行政センター 地域振興担当

浜松市中央区流通元町20番3号

TEL 053-424-0115

Eメール e-shinko@city.hamamatsu.shizuoka.jp

「十湖賞」と「浜松市中央区東地域俳句の里づくり事業」

松島十湖翁は江戸時代末期、現在の浜松市中央区(旧浜松市東区)豊西町に生まれた俳人にして政治家、さらには地域貢献に務めた篤志家です。生涯に詠んだ句は七千句とも言われ、全国各地に多くの門人がいました。十湖翁の俳句は、松尾芭蕉からの蕉風を継承すべく、花鳥風月といわれる春夏秋冬・四季折々の自然、その中で生活を詠む伝統的なものです。「はま松は出世城なり初松魚」は、「出世の街・浜松」を象徴した、浜松を誇る気持ちを詠んだ句です。

本事業では、こうした十湖翁の遺徳を称えるとともに、「郷土を愛する心」を今に伝えるべく「十湖賞」俳句大会を開催しています。

中央区東地域(旧東区)は、古来多くの俳人を輩出するとともに、多くの句碑群を有しており「俳句の里」としての側面もあります。

このような背景のもと、俳句の里づくり事業実行委員会及び浜松市中央区東行政センターでは、「浜松市中央区東地域俳句の里づくり事業」を行っています。

第十八回「十湖賞」俳句大会入選句集

令和八年二月十一日(水・祝)

於 浜松市総合産業展示館 北館1号ホール



目次

ごあいさつ	2・3
十湖大賞	4
十湖賞	5
区長賞	6
県教育長賞	6
市教育長賞	6
特選	7
佳作	8・9
奨励賞	10 13

選者

秋原容子氏

(「みづうみ」同人)

高柳克弘氏

(「鷹」編集長)

村松二本氏

(「椎」主宰)

百合山真苗氏

(「海坂」編集長)

※五十音順

第十八回「十湖賞」俳句大会投句実績

一般の部		高校生の部		中学生の部		小学生以下の部		全 体		一般の部・地域別	
人数	投句数	人数	投句数	人数	投句数	人数	投句数	人数	投句数	地域	投句数
861	1,659	1,550	2,790	2,204	3,351	1,682	2,908	6,297	10,708	市内	612
										県内(浜松市外)	173
										県外	874
										合計	1,659

※募集期間：令和7年7月1日(火)～令和7年9月30日(火)

浜松市中央区東地域俳句の里づくり事業実行委員会

委員長 松島 知次

第十八回「十湖賞」俳句大会は、全体で六千二百九十七人、一万七百八句もの投句をいただきました。一般の部にあつては、全十八回で最多となる八百六十一人の方から投句をいただき、大変喜ばしく思っております。

今回大会も、各部門各世代ならではの実感のともなう素晴らしい句を詠んでいただきました。俳句に親しむ大人から子供へ、学校で俳句に触れた子供から大人へと、世代を超えて俳句文化が広がり、日本語の持つ言葉の豊かさや季節の移ろいへ意識を向けるきっかけとなれば幸いです。

浜松市中央区東地域俳句の里づくり事業実行委員会では、これからも俳句を通じ、郷土を愛する気持ちを育むとともに、俳句文化の振興を図るため創意工夫を重ねてまいります。

終わりに、入選された皆様に心よりお祝い申し上げますとともに、選者の皆様、並びに事業推進にご尽力いただきました関係者の皆様へ厚くお礼を申し上げます。皆様方の今後ますますのご活躍、ご多幸をお祈り申し上げます。挨拶とさせていただきます。

浜松市中央区長 岡安 章宏

浜松市中央区東行政センターでは、中央区東地域ゆかりの俳人で、明治・大正期に活躍した松島十湖翁にちなみ、平成十九年度から「俳句の里づくり事業」を実施しております。

今年度も引き続き、「十湖賞」俳句大会をはじめ、若年層への俳句の普及を目的とした「小中高校俳句講座」や、市内高校生が俳句の作品性や鑑賞力を競う「高校生俳句選手権」を開催してまいりました。

「十湖賞」俳句大会では、全国各地から多くの皆様に投句いただきましたことを、大変喜ばしく思っております。中央区内の他地域からの投句も増加しており、東地域の大切な財産である俳句大会が、中央区全体、さらには浜松市全体へ広がり、市民の皆様の郷土愛醸成につながることを願っています。

結びにあたり、大会に投句いただいた皆様、選考していただいた選者の皆様、そして本事業に携わっていただいた全ての皆様に深く感謝を申し上げます、挨拶とさせていただきます。

十湖大賞・十湖賞〈小学生以下の部〉

メンダコに会えたらいいな夏休み

豊西小学校四年 三島実紗

評：思いを素直に述べて伸び伸びとした一句に仕立てている。「メンダコ」は沼津港深海水族館で展示されているが飼育が難しいらしく、行けば必ず見られるとは限らない。作者はそれも知っていて、夏休みに対面できることを願っているのだろう。ほほえましい句である。(村松二本)

十湖賞

〈一般の部〉

少年に翼の生えて夏休

愛知県名古屋市 鈴木薫

評：翼の生えて——とは正に至言である。解放感が伝わってくる。少年はあれもしたい、これもやりたい、と夏休みを満喫している。満足気な表情も想像出来る。傍で見ている作者も楽しくなってきたのでは？(秋原容子)

〈高校生の部〉

遠霞フルートに入る息朗々

星陵高校二年 福原すみれ

評：吹奏楽部の練習で、外に出てフルートを吹いている情景を想像した。ふつうはフルートの奏者を主語にするが、ここでは「息」を主語にしている。そのことで、遠くまで届くフルートの朗々たる音色がより実感される句となった。(高柳克弘)

〈中学生の部〉

ひまわり君うつむくなんて君じゃない

曳馬中学校三年 中田凜太郎

評：太陽に向かって堂々と咲くひまわりに誰もが元氣や勇氣を貰います。そのひまわりがもうなだれていたらどうでしょうか。自分も元氣を無くします。この句は親友を励ますエールのようにもとれ、友情を感じる良い句だと感じました。(百合山真苗)

区長賞

〓一般の部〓 島巡る自転車風を光らせて

山梨県都留市 野中 定代

評：春の到来を喜ぶ思いが伝わってくる。何気ないけれども上五の「島巡る」という措辞が大きな効果を上げている。読む者に海辺の光景を想像させるからだ。そうすると「風」だけでなく波も光っているように感じられる。実に春らしい景色である。

(村松 二本)

県教育長賞

〓高校生の部〓 夏の家こたえのない日砂を踏む

聖隷クリストファー高校三年 伊藤 七菜

評：浜辺に来て、考えごとをしている。雄大な夏の家に「こたえ」をもらおうとしても、この世の多くのことに正解はない。「砂を踏む」の表現には、ときに悩みつつも踏ん張って生きていこうとする力強い意志が感じられた。(高柳克弘)

市教育長賞

〓中学生の部〓 初めての「イマジン」を聴く八月十五日 笠井中学校二年 鈴木 天翔

評：八月十五日は終戦記念日。「イマジン」は愛と平和の大切さを伝え続けたジョン・レノンの楽曲である。戦争を知らない作者は「イマジン」をどんな思いで聴いたのだろうか。結句の八月十五日が効いている。(秋原容子)

〓小学生以下の部〓 夏祭りひみつの小道走りぬく

大瀬小学校六年 若林 侑依

評：町の公園や運動場へは友達揃って知っている道を行くのですが、楽しみにしていた夏祭りに限って自分だけ遅刻しそうに。約束を守る為にひみつの小道にひとり挑戦した勇気を「走りぬく」に感じました。(百合山真苗)

特選

〓一般の部〓

連風のひとつが右にみな右に

北海道札幌市 藤林 正則

君が好きな惣菜買って鯛雲

浜松市中央区 西野 真托

〓高校生の部〓

カーネーション言えない五文字十七歳

聖隷クリストファー高校三年 坂口 真彩

栗の毬胸まりの痛みと似て尖る

静岡商業高校二年 神戸 彩結奈

〓中学生の部〓

踏み込むと突き刺す空気寒稽古

積志中学校三年 影山 琳音

夕焼けや友との会話くだらない

積志中学校三年 有働 快琉

〓小学生以下の部〓

大空にさとうのしづく天の川

中郡小学校五年 牧野 紗花

なつやすみほいくしみたいたいだおとうとの

与進北小学校一年 菅原 莉乃

佳作

△一般の部▽

胎動の強きに目覚む良夜かな

静岡県袋井市 本多純代

夫を刺す蚊に渾身の一打かな

浜松市浜名区 前島智子

ランナーの誘はれてゐる芋煮会

和歌山県日高郡 武田恵子

マフラーのままカヲオケの一曲目

長野県須坂市 宮部高典

由良の門にテントを張りて星月夜

京都府舞鶴市 越後正行

一冊を旅して戻る夜長かな

福岡県小郡市 都成悦子

△中学生の部▽

輪ゴム巻くたべかけの菓子夏休み

静岡県西遠女子学園中学校二年 内山絢

海に寝て海月と聞くや波の音

積志中学校三年 福嶋新汰

花火みた必死に課題終わらせて

天竜中学校三年 溝口大翔

炎天下裏に走るがオフサイド

積志中学校三年 大場蒼空

陽炎でゆがむ世界に迷いこむ

与進中学校三年 扶川航士郎

雪だるま溶けないうちに抱きしめる

与進中学校二年 稲田愛華

△高校生の部▽

定演のラスト一音風薫る

聖隷クリストファー高校三年 村岡瑞葉

冬隣かすかに祖母のたんすの香

静岡商業高校一年 中村彩乃

のびのびとバトンを貰ひ秋立ちぬ

神奈川県立横浜翠風高校二年 那住悠太

蝉時雨語らぬ祖父の手のぬくみ

浜松修学舎高校一年 小松天零

冬の海誰か私を呼んでいる

浜松東高校一年 竹山琴乃

口喧嘩溽暑のせいで止まらない

浜松修学舎高校二年 星野葵

△小学生以下の部▽

おさんぽでパパとおそろいサングラス

笠井小学校二年 黒宮梨生奈

ストーブに乗ってるやかんあべれだす

積志小学校五年 徳田千波

教室に桜の雨が入りこむ

与進北小学校六年 木曾伴晴

富士登山どんどんかわる雲の形

大瀬小学校四年 神宮小夏

美らの海クマノミの群れ南風

積志小学校五年 石井悠

赤とんぼ秋を知らせるゆうびんや

可美小学校四年 東金将生

奨励賞

△一般の部▽

髪かわかす妻の無防備良夜かな

浜松市中央区
金子 治夫

秋便りペンフレンドは七歳児

浜松市中央区
河口 康子

霊峰の水のにほひや新豆腐

千葉市原市
大内田 芳乃

薄氷の風の重みに鳴りにけり

神奈川県横浜
持田 敏朗

父の忌や媚びず揺るがず冬薔薇

浜松市中央区
近藤 晴子

日向ぼこネコはスマホを使わない

宮城県遠田郡
武田 悟

ミモザ買う妻の笑顔の戻るかも

東京都三鷹市
小原 英之

生まれたよとかおめでととか網戸越し

京都府京都市
岸野 由夏里

蕎麦屋寄席円座拾枚ほど並べ

静岡県富士市
佐野 明美

てらりと蜥蜴しゆるりと岩に消えにけり

東京都国分寺市
寺田 伊津子

△高校生の部▽

明の春わき立つ心空に投げ

浜松城北工業高校一年
齋藤 貫慈

初めてに挑んで育つ雀の子

浜松修学舎高校三年
織部 俐慧

水筒をまわし飲みする夏の午後

聖隷クリストファー高校三年
高橋 瞬

コンビニで時間をつぶす夏の夜

浜松東高校一年
鈴木 琉威

冬籠り筆の余白に息を置く

宮城県古川黎明高校三年
江良 さくら

蚊を狙う百人一首とるように

浜松修学舎高校三年
高橋 奈々未

星月夜空見てかける Spotify

浜北西高校二年
大橋 瑠花

負け試合ラケット置きし冬の月

聖隷クリストファー高校三年
山内 湮

恋猫か近寄り見ればゴミ袋

聖隷クリストファー高校三年
温井 瑞稀

風呂上がりアイス片手に復習す

聖隷クリストファー高校三年
藤原 龍之介

しほさぬは春満月の息づかひ

神奈川県藤沢市
河本 朋広

風花や風化させてはならぬこと

兵庫県姫路市
田辺 富士雄

びいどろの瓶のはちみつ日脚伸ぶ

群馬県前橋市
外丸 幸子

うどん屋がパン屋になりて鄙の春

大阪府寝屋川市
岡崎 正子

SLのヒョオオと啼きて山眠る

愛知県豊橋市
古志乃 あんこ

朝露や日向の馬の大きな瞳

静岡県周智郡
鈴木 久代

角一つ違へて釣瓶落しかな

神奈川県横浜
沼宮内 薫

川音を闇に返して鵜飼果つ

兵庫県神戸市
末永 拓男

しわしわを誉められてゐる干大根

香川県中多度郡
端 あつ子

心太ひと突きに海匂ひけり

浜松市中央区
宮澤 秀子

運動会今日の弁当豪華なり

聖隷クリストファー高校二年
岡田 芽依

せきひとつ静かに響く冬の空

浜松東高校一年
望月 歩乃佳

校舎からコートを見る日々夏深し

聖隷クリストファー高校三年
鈴木 朝香

夏の雲遙かに続く白い波

長野県野沢南高校二年
田中 莉駆

身にまとう金木犀のカーディガン

浜松修学舎高校一年
後藤 彩羽

筆持てば蝉の声さえ遠ざかる

浜松修学舎高校一年
五明 優月

幸せの木の実をほおにハムスター

浜松修学舎高校一年
伊藤 友維

炎天下何リットルも飲み干した

聖隷クリストファー高校三年
内山 陽生

冬至過ぎあまりかぼちゃに忘れ柚子

聖隷クリストファー高校三年
坪井 奏人

悩み事扇風機だけ首を振る

星陵高校二年
後藤 那月

奨励賞

〈中学生の部〉

この暑さ君と乗りきる九回目

西部中学校二年
村松愛花

口々に「ブラボー」春のコンサート

積志中学校三年
白木香帆

月明かり古池ひとつ声もなし

加藤学園暁秀中学校三年
市川武琉

天竜の遠き水音蟬時雨

北浜中学校二年
松浦煌

仲秋にカキーンと打ったホームラン

都田中学校三年
渡邊 宗右介

秋の雨ことり眠れる土静か

丸塚中学校三年
伊藤 夏帆

もう無理と笑って歩く炎天下

与進中学校二年
黒崎 友里菜

地図もって歩き始めてすぐに汗

笠井中学校一年
松島 由奈

せんぷうき前ではねこもおじさんだ

丸塚中学校三年
氏家 璃音

夏の日は吹く風すべてドライヤー

笠井中学校一年
伊藤 千明

〈小学生以下の部〉

夏休みいもうとのせわがんばるぞ

笠井小学校二年
高木 宙

夏の海ここにいたいなここがいい

与進北小学校六年
磯口 煌大

スイカわりたのしみすぎてねむれない

豊西小学校三年
大澤 珠凜

長過ぎる国語の授業南風

蒲小学校六年
山越 悠馬

ふじの花ひいばあちゃんのすきな色

南部町立栄小学校二年
加藤 潤大

ぼくがひく天しのテーゼセミもなく

笠井小学校四年
西岡 佑陽

ピンクいろゆるかたわたしはおねえさん

豊西小学校三年
田口 稀子

この空に花火いっぱい上がりそう

豊西小学校四年
田邊 湊也

きんぎょさんひとがとおるとごはんくれ

県居小学校一年
飯尾 美空

夏休み巨大なお寺善光寺

笠井小学校五年
遠藤 平結

山梨の桃は少々ツンデレだ

丸塚中学校三年
丸岡 そら

夏休み宿題よりも雲を見る

笠井中学校二年
鈴木 真斗

妖怪と秋の夜長にかくれんぼ

丸塚中学校一年
石川 佑香

透明な風鈴の音ひびきけり

積志中学校三年
永田 悠斗

浜松に二度目の転校夏休み

笠井中学校一年
遠藤 翔

先輩の最後の夏を焼き付ける

笠井中学校二年
荻野 ひまり

大花火僕と地球が震えてる

笠井中学校三年
立田 翔

花火果つつかないだ手と手ほどけずに

丸塚中学校三年
一戸 優真

春園に翻訳したき鳥のこえ

静岡県西遠女子学園中学校二年
富永 藍

もくもくと青を飲み込む入道雲

天竜中学校二年
油井 愛佳

ゆうやはけは自分の心をひらくもの

有玉小学校六年
佐藤 さな

夏休み万博富士山無人島

有玉小学校六年
安間 亮介

せん風機ぼくの前からはなれない

積志小学校五年
高井 岳

りんごあめ花火がうつって星みたい

積志小学校五年
夏目 佳穂

風を切りたてがみなびく炎天下

蒲小学校六年
太田 百

ブランコで空までいってあそびたい

与進北小学校五年
馬場 ののか

ひこうきくんにゆうどう雲にぶつかると

与進北小学校二年
木下 桜良

うんどうかい風がわたしのおうえんだん

豊西小学校五年
松島 瑞來

夏つばめクルクルピューとサーカスだ

豊西小学校四年
由本 凪

川遊び肉も私もこげこげだ

積志小学校五年
平川 実和子